

十年目に思う

“こんなこと” “あんなこと”



まとめ・編集部

〈十年経って……〉

二学期が始まって間もないある日、保育経験十年余りの先生方の集まりに、私も参加させていただきました。親しい方も、初

対面の方もありましたが、全部で六人、別に目的のある討論の場というわけではありませんが、それだけに、ある時は意見を言

ってわめき合い、ある時は静かに語り、興味ある話し合いはつきませんでした。経験十年といっても世間からみれば、まだまだ若い方たちで未熟な部分もあるので

しょうが、保育者の回転の早いこの世界では、もう指導的立場に置かれることもあり

ます。彼女たちは「そんな大それたことは全く考えていないわよ」と口々に言いますが、いずれにしても、これからの、いわば第二世紀目の保育界をまさに背負っていくことになる方たちであることは、間違いないささうです。

そんな彼女たちがこもこも語ることは――。

「先生になった当時は、十年たっている先生というと、ものすごくえらく見えたのに、いざ自分になってみると、ああ、こんなものかという感じですね。無我夢中で、使命感にもえて、それが自分をささえて来たような所があるんですが、そういうものは、パッと切り捨てられて、妥協した……というわけでもないけど、これで良いんだっていう気がします」とKさん。

「私も最初は、早く良い先生になろうとか、皆から信頼される先生になろうとか、一生懸命だったし、子どもにも、良い所を伸ばしてあげなくちゃなんて、今思えばわざとらしい保育をしていたと思うんですが、今は何の気負いも捨てちゃって、広い目で見られるようになったと思います」とHさん。

「私は私立の小さな幼稚園で、教えてもらう先輩もいないので始めたので、暗中模索で、今思うと盲蛇におじずでやって来たところがあるんですが、このごろやっと、先生っていうのはどんな役目をすれば良いのかわかったようです」とSさん。

「このごろは保育のことに関して、とても自然な、楽な気持ちでやっているの、ああしなくてとはとか、こうすべきだとか、声を大きくして話すことはないわ」とIさん。

「気負い」のない「自然な」気持ちだと皆さんおっしゃいますが、さりとこのように話せるようになるまでには、まよったりぶつかったり、もうやめようかと思ったり、ひと山もふた山も乗り越えて来られたのだろうと、十年の重みを感じる言葉でした。「だけど、それだけに馴れているのは恐ろしい」とTさんから声がありました。

「時々、上手に扱いきていって感じることがあるの。たとえば、子どもたちが騒がしい時はすぐバットと手遊びをしたり、雨の日にぶらぶらしていると、じゃんけん合戦を誘導して作ってしまったり、テクニクを使ってさらっとまとめてしまうのね。これはかわいいことじゃないかしら。それに、一日の流れのパターンを作って子どもをのせることも上手になる。決まった生活のリズムを作ってしまうと、先生の方も楽だし、子どもの方も生活がしやすいのね。日案があって、一応今日やることが決まっていると、楽なときもあるんですけど、いつも次にすることのための手順や時間が気になって、思いきって子どもと一緒に楽しむことができないし、その枠の中に小さくおさまってしまう危険もあるわけですね」

全く同感だとKさんも言います。

「毎日毎日いろんなことが起こって、毎

年新しい子どもにめぐり合って、新鮮な気持ちですごしているようにできて、いつのまにか自分のパターンを作ってしまったって、そしてその繰り返しで十年でも二十年でもやれてしまうっていう感じがします。私もだんだん自分のパターンに合うように逆に子どもたちをひきつけて、それに気づかずにドブブリとつかっていつてしまうような気がするんです。私の方が変わらなければいけない場合でもそれに気づかず、つい馴れから自分のやり方で子どもをどんどん流していつてしまう。時々ふっと気がついて考えてみると、誰のための幼稚園なんだろうと思ってしまうわ。これで本当に子どものためにしているんだろうか、自分だけが良い気持ちになって、本当は自分のためにしかやって来なかったんじゃないかって

もちろんテクニクは大切なものでしょうし、日常保育をある程度パターン化する

ことは、子どもたちが混乱するのを防ぎ、安定してすごさせるために必要なことでしょうが、そこで安易に流され、小さくまとまりすぎてしまう危険が反省されています。「子どもは恐ろしい位に、スルスル、スルスルっていう感じで保育ののって来ちゃう」とも言われていました。思うようにならず、ふりまわされている若い先生方が聞いたらうらやましいような話でしょうが、思う通りに動かしてしまうことの方が問題を含んでいるのかもしれない。

Tさん、Kさんの言うことは、単に馴れに対する個人的な反省にとどまらず、幼稚園のあり方そのものにもふれるものだと思われました。一日の保育をパターン化してしまっただけでよしとしていないか、大人の作った枠組にのせすぎではないか、そんな疑問と反省なのでしょう。Kさんは「今の幼稚園は、本当に子どものためになっているのかしら。幼稚園は、本当に必要

なのかしら」と話し合いの間に何度も口にしました。

へ「これだ」と思うこと

Hさんは、保育の中で何が大切か、自分なりにつかめて来たが、それを人にわかってもらおうのはとてもむずかしい、と次のように話しました。

「このごろ、早期教育とか指導の効果とか、無駄をはぶいたカリキュラムとか言われてますね。保育の本質は決してそうじゃない、教え込むのでなく、子どもに沿ったやり方が本当なんだと私は思っていますけど、保育の仕事というのは次の日に成果があらわれてくるものではないし、だからといって何年後の姿を見てちょうだいと言いきれるものでもないで、実際の見た目とか人の評価とか、効果のあらわれやすいものでつい動かされてしまいます。私

自身、幼児期にはこれが大切なんだっていうことを、もう一度しっかりと思いかえさないといけないなと思っています」

Hさんは公立幼稚園勤務で、園長は頻繁に代わり、しかも保育の現場経験がない先生が多いから、「私たちはこういうことを大事にしているのだ」ということをわかってもらうのに大変苦労をしていると言います。しかもどうしてもわかり合えない場合があると、一つの悩みにぶつかっているようにでした。

「例えば子どもをどうみるかという場合、どんな子がいても良いわと受け入れるのと、そんな子がいたら迷惑だ、その子のために他の子が指導を受ける機会が少なくなってしまうと考えるのと、そういうことは何時間話し合ってもためなのですね。価値観の違いというか、教育観の違いというのか、これだけはゆずれないっていうものがあると、このごろわかって来たような気が

します」

Hさん自身、表面にあらわれる効果や人の評価に動かされやすい自分に気づきながら、だからこそなお、大切なことはしっかりと守っていかねければならないと強調するのです。「この子がいて迷惑」などと本気になって考えている人もいないでしょうが、Hさんが言うように根本をすっかり自覚していないと、知らず知らずのうちに子どもを邪魔者の立場に追いやってしまうことはありうるのではないかと思われました。次のIさんの発言からも、それはうかがわれました。Iさんは知恵遅れの幼児の保育をしている方です。

「普通の幼稚園にも並行してお願いしている場合があるんですが、遅れている子を受け入れてくださる幼稚園ですから、割合に課題なども少ないんです。それでも、あれをしましょう、これをしましょうと言うことがあって、子ども自身何とかしてそれ

についていこうと緊張しているんですね。

以前私が見学させてもらった時のことですが、私の姿を見つけると助けを求めように泣き出した子がいたんです。一人一人の子どもの状態をとらえて課題を与えるというのは、とても難しいなあと思いました。これをやらせなくちゃという、どちらかというと大人の一方的な考え方ですすめてしまおうと、こぼれる子はどんどんこぼれていってしまうんですね」

この場合、遅れた子どもだからむしろ現象がはっきりとあらわれて来たのかもしれませんが、問題を持ったまま、気づかれずに見過ごされてしまう子どもがいらないか、大人のやり方、考え方で無意識のうちに追いつめられる子どもがいらないか、反省させられることだと思いました。

「本当に大切なことは何か」をつかんで、保育の中で実践しようとする態度は、その日集まった方たちに共通したものでした。

中でもMさんはやはり公立幼稚園で、園長が代わる度にくるくると方針が変わってしまおうという経験から、その度にとことん話し合って、かえって自分たちの考えをしっかりとためて来たと言います。「でも、これは一人だったらだめで、職員全体がまっつて、私たちは言えたことが強みです」と、形式的な卒園式を子ども中心のものに変えていった具体的な経験を話されました。「これだ」と思うものをしっかりとつかみ、職員全体で少しずつ実現していく努力をつみ重ねながらも、Mさんは、

「私たち公立の幼稚園ではやはり規制が強すぎて、どうあがいてもその枠の中でやっているにすぎないって気がするんです。だからどんなに小さな幼稚園でも良いから、子どもたちと、思うように過ごせる場を作りたいって、真剣に考えた時期があるんです」

と言います。思わず皆は、個人で小さな

幼稚園を開いているSさんに、いっせいに羨望の目を向けてしまいました。

「皆さんがおっしゃるような束縛は、幸い全くないので、子どもとの関係では、思う通りにやって来られたわけです。それだけに責任があるし、これで良いのかな、これで良いのかなってまよいながら、小さなことから見つめていくより方法がなかったみたいです。何も知らないで一から始めて、大変なことは大変だったけど、子どもたちが変わっていくのを見ると、ああ、やっていて良かったって思います。ただ、がっかりしてしまうのは、幼稚園に対するお母さんたちの考え方なんです。入園時期になると、送迎バスはありますか」「給食はありますか」って電話がかかって来るんです。内容じゃなくて、そういう基準で幼稚園を選んでいますね。幼稚園に入れてしまえば楽だ、なるべく楽ができる幼稚園に入りたいなんて、このごろのお母さんは少しな

まけものすぎますよ。私は今、むしろお母さん教育の方に頭を悩ませているんです」

〈母親にも知ってほしいこと〉

Sさんから母親の問題が提出されますと、期せずして皆、うなずきあいました。対子どもの問題は今はもう自然な感じで、大げさに言うことは何もないけど、対母親が問題だと言います。

「昔のお母さんはもっと忙しくて、親としての生活があったのね。それがなくなつて、へんにまわりが見えて来たんじゃないかしら。他所はこうだからとか、こう言われたからとか、常に浮き足だっているような気がする。そしてなまじ幼稚園というレベルに早くのせてしまうから、他の子どもが目について比較してしまうんですね。そして、自然に待てば伸びていくものを、のばそう、のばそうとするのね。そういうの

を見ると、なまじ幼稚園があるからいけないんじゃないかという気がして来ます」とKさん。

「子どもの育て方とか、生き方とか、私たちとお母さんと一致する必要はないんですけど、お互いに本心を出し合って話し合いたいというのが、今の私の課題です。四歳、五歳って二年間しかないのだから、その二年間でよそ様向けの顔でない、自分の顔を一人一人見せてもらいたいなあと思ってします」とMさん。

「そうね。子どものことを思うと、この二年間で、どうにかしてお母さんにしっかりした教育観を持ってほしいわね。今の日本の教育を見ると、小学校へ入ったらもうどんどんまき込まれてしまう。子どもにとって大事なことはこういうことだとして、しっかり伝えて、お母さんに正しく考えてもらう土台を作る必要があると思うの。土台をちゃんと持っていれば、随分子

どもを見る目も違ってくるし、学校でギューギューされても、流されずにすむんじゃないかしら。お母さんの教育をする場所は、この時代をのぞいたらあまりないんじゃないでしょうか」とIさん。

いくら幼稚園でそう言っても「幼稚園はのびのびやってそれで良いけど、学校はそうはいきません」となってしまう。幼稚園時代の考え方は考え方で「それまで」と思うお母さんが多いんじゃないかという意見も出されましたが、それでもやっぱり考えてほしいこと、知ってほしいことは言わなくては、と熱っぽく話し合われました。

お母さんたち一人一人に各々の生活があり、各々の考え方があるのですから、別にそれを一致させようというのではありませんが、そのものになるもの、共通したものが何かあるような気がしました。それは保育の中で子どもたちに教えたいと思っているものと同じものなのです。「お母さんを

教育するのはこの時だ」などと言葉で書いてしまうと、随分大げさな、身のほど知らずにも思われそうな言葉ですが、話し合いを聞いていた私には、少しもそんな気持ちはおこりませんでした。口先だけではないものが感じられたからでしょうか。

十年余りの実践を通して、それぞれの方が「これだ」と思うものをとらえられているように思いました。「それは何ですか」と訪ねても、明確な言葉で返って来ないかもしれません。もちろん目に見える成果として提出されるものではないし、子どもの上に効果として測られるものでもありません。しかし、「保育をする」ということは、こういうことだ」「こが大切なんだ」という確かな手ごたえを感じているのだと思います。その手ごたえが、これからの保育の核になるものなのでしょう。

戦後急速に数の増加をみた幼稚園、保育

園は、内容があまりにも多様化しています。これからはその内容が問われなければならない時ですが、「核」をとらえた彼女たちのこれからの保育実践が、それに一つの答を与えてくれるのでしょうか。

「やっと自然な気持ちになった」とか「やっと広い目で見られるようになった」などの話をきくにつけても、二年、三年ではまだ、ただ、ただ目先のことに追われているだけで、五年、十年やって、やっと本当のところがわかって来るのだなあと思えました。たゆまずに、ゆっくりと実践を続けていく先生が一人でも多く出ることを、そして続けていかれる周囲の条件が少しでも整っていくことを、期待してやみませんでした。(水田順子)

